

報告 3：李恩民（桜美林大学）

「中国の対外援助：東南アジアの現場から考える」

中国は建国の直後から、最大の開発途上国として、同盟国の旧ソ連、先進国の日本、NIEsの韓国などから対外援助または ODA の供与を受けながら、外交の一環として第三世界に属すアジア・アフリカ・ラテンアメリカ・太平洋諸国に、政治色の強い対外援助を実施し、国際地位の向上、国連常任理事国への就任など多数の戦略的目標が達成した。これは明らかに従来の先進国から開発途上国への開発援助を指す「政府開発援助」(ODA)でなく、一つの発展途上国から他の発展途上国への一種の戦略的援助である。筆者はそれを「中国的 ODA」と名付け、現地調査や事例研究に基づく新しい理論の探求を試みている。

拙稿は 1950 年代から東南アジア諸国、特にベトナム、ミャンマー、タイ、インドネシアなどへの援助に焦点を当て、中国対外援助展開の政治過程を究明するだけでなく、レシピエントの視点からプロジェクトの現地調査を経て、援助と被援助の歴史と記憶を考察してみる。拙稿は中国の対東南アジア援助を三つの時期に分けて論述を展開する。第 1 の時期は、中華人民共和国樹立の翌年（1950 年）からの 30 年間の対外援助で、主な特徴は軍事的な援助が中心である。第 2 の時期は、1980 年以降の 20 年間の対外援助で、経済利益を追求する経済援助が中心になっている。第 3 の時期は 2000 年以降で、海洋進出という大戦略を兼ねての対外援助を実施する時期である。

第 3 の時期における中国の対外援助の全面的展開、沿海地域における海洋調査活動の活発化などによって、中国の対外援助外交は急に注目の的となり、学術研究やジャーナリスト報道のホット・トピックにもなった。そのなかで、地道な努力に基づき世に問うすばらしい研究成果もあれば、中国の外交手腕を「新植民地主義」として非難する論評もある。拙稿はフィールドワークの成果として中間報告を行い、中国の対東南アジア外交の重要なファクターである対外援助の「謎」の一部を解き明かしたい。